

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	平成23年12月の開所前に全職員で作成した理念を、玄関や各ユニットに掲示し、意識して実践に繋がれるように努めている。自己評価の意見から、定期的にスタッフ会議等で確認していく。	法人の理念とは別に、全職員で考えて定めた運営理念である「安心して自分らしく生活できるよう支援します」、「地域の方々と触れ合い、ともに笑顔で暮らせることを目指します」を玄関やリビングに掲示しており、常に実践に繋げるよう心掛けている。また、利用者や家族にも理解してもらえるよう努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の祭り、小中、地域の運動会、水害訓練、老人会輪投げ練習会、作品展等に参加。小中学生ボランティアや中学生職場体験、保育園への訪問、自作作品展示の依頼や畑の作物を頂く等の交流の機会がある。	町内会との連携が非常に良好であり、春夏の祭りを始め、年間を通じた町内会の各種行事にも参加している。町内会の運動会に参加した際には、事業所に合わせたプログラムが用意されるなど、町内会の一員として地域に溶け込んでいる様子が窺える。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	広報誌で利用者の様子を紹介したり、行事等で地域に出向いたり、外に出ている様子や、運営推進会議で報告する等で、認知症の人の理解に繋がっていると思われる。支援の方法までは活かされていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者、家族、町内から2名、地域包括支援センター、市担当職員、事業所職員で構成。報告を基に、意見、指導を頂き、スタッフ会議で共有し、改善に繋げている。家族に会議録等を送付し報告している。	運営推進会議は利用者、家族の代表、町内会役員、地域包括支援センターや市の担当者と事業所の職員で構成されている。事業所の活動報告や運営について、活発な議論が行われており、利用者のサービス向上のためにフィードバックもなされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	今年度は運営推進会議で1年間指導を受ける年となっていて、会議毎に厳しい指導を受けている。	今年度の運営推進会議において、年間を通じて指導を受けることとなり、事故報告や日常的な業務について報告し、その都度厳しい指示や指導を受けている。また、受身の姿勢だけでなく、事業所側からも直接に市に出向いて現場の声を届けるよう指導も受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	グループの権利擁護委員会の研修で、穴埋め問題を実施。玄関は夜間以外、ユニット入口扉は、複数職員出勤時に開錠。自己評価から、人感センサー使用や言葉の身体拘束について課題あり、今後に繋げていく。	毎月1回、法人グループ内に設置されている権利擁護委員会に職員が出席して、議論を重ねたことで穴埋め問題を実施することに決定した。身体拘束を行わないケアの実践のため、各施設における取組みの総合的な見直しを行うなど、徹底した取組みに努めている。人感センサーの導入や身体拘束を想起させる言葉遣いの解消が今後の課題として掲げている。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内地域密着型6施設全体研修後、各自で目標を立て、毎日チェックし、1ヶ月毎に振り返る機会を持ってきた。今後、リーダーが地域の研修会参加後、研修を展開していく予定。	法人内の地域密着型の六つの施設から、職員が高齢者虐待防止研修に参加しており、関連法規の理解に努めている。研修後は各自が目標設定し、毎日チェック表に記入するとともに、月に1回振り返りの機会を設け、リーダーが内容をチェックし評価している。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は数年前に研修を受けたが、その後や他職員に機会はなかった。元々利用していた利用者が1名入所。家族が役割を担っており、活用できるような支援はしていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、時間を取り、丁寧な説明を心掛けている。料金改定時には、本部で説明会を開催し、欠席者には文書により説明し納得を得ている。説明会の出欠の確認の電話の際にも簡単に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の要望は、必要に応じて適宜家族に伝えるようにしている。意見や要望を、利用者からは日常の中で、家族からは面会や電話の機会に聞き、ユニット会議等で共有するように努めている。	事業所内に意見箱を設置するほか、毎月の利用者家族への状況報告を行うことで、忌憚のない意見や要望を募っており、確認した意見等に対しては、些細なものであってもユニット会議で検討し、検討結果を今後の対応に繋げるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常的に出た意見等を、毎月のスタッフ会議やユニット会議で意見交換の機会を持ち、反映に繋げている。正職員は半期に1度、人事考課の面接の機会がある。	毎月1回開催されるスタッフ会議とユニット会議において、施設運営について職員が意見や提案を出し合い、議論を重ねている。また、半期に1度行われる人事考課の面接において、職員の個人的な意見や要望等を受け止める機会を設け、細かな点も見逃さないよう配慮している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者が、グループ長に勤務状況等を報告している。8月から欠員で、厳しい状況が続いている。適宜、ハローワークへの問い合わせ等をしてもらっているが、変わらない現状である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員全体として、法人内地域密着型6施設全体研修を経、各自の研修に繋げている最中である。職員の資質向上に向け、リーダーが研修に参加し、今後に関係していく予定である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内地域密着型6施設施設長が毎月集まり、情報交換や研修会の組立をしている。今後は、相互訪問等を取り入れ、活用していきたいという話が出て来ている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接の際に、話を聞きながら情報収集し、職員間で共有している。利用開始後、情報を基に、声を掛けながら安心感が持てるよう対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学や申し込みの段階で時間を取り、家族等の話を聞く機会を設けている。利用開始時の契約の段階でも時間を取り、関係づくりができるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約時に、契約解除時の確認をし、利用継続が難しくなった際には、他サービス利用に繋げられるよう相談しながら進めていく旨伝えている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	調理作業や掃除等、それぞれの方が役割を持って、できる作業をしてもらいながら、職員と一緒に過ごしてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月の手紙や、適宜の電話連絡や面会等に状況を報告している。協力病院精神科以外の受診の際には、できる限り、家族の付き添いをお願いしている。	毎月行われる担当職員による家族への利用者の状況報告の際に、利用者との日常会話の中で得た本人の想いやエピソードなどを伝える工夫をしている。また、協力病院以外の受診については、可能な限り家族にお願いして、本人を支える共同体であることを忘れないようにしている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や友人知人の訪問や、外出外泊の機会が途切れないように、機会ある毎に、声掛けや、面会時の環境作りに努めている。状態の変化に伴い、機会が減ってきている現状もある。	受診や理美容などに関しては家族にお願いしており、以前からの馴染みの関係が途切れないよう努めている。お盆や正月の帰省が可能となるよう、家族への呼びかけにも力を入れているが、本人の状態の変化に伴って難しいケースも増えている。	本人が大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう努力しているが、現状では十分ではないように思われる。入居生活が長くなると、馴染みの人や場所との関係性の継続維持が大切なため、一層の工夫と努力を期待したい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	配席に配慮したり、話題を提供したり、仲介に入ったりしながら、それぞれが穏やかに関わることができるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	郵便物が届いた際に、家族に連絡し、状況を聞くことはあるが、経過のフォローはできていない。親戚の方から何年か振りに連絡があり、家族に連絡したが、連絡がつかないということもあった。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の様子や会話、面会時の家族の話や以前の暮らしの情報等から、希望や意向を汲み取るように努めている。	利用者、家族やセンター方式アセスメントシートから、これまでの暮らしぶりや本人の思いや意向の把握に努めている。日常の会話や表情からもその思いを汲み取り、馴染みの暮らしに繋げるよう支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前面接時の情報や、日々の会話、家族の話等から、情報を得ている。	利用開始前に自宅や利用中の事業所を訪問し、本人、家族、前担当者から情報収集を行い、本人が今迄馴染んできた生活環境の把握に努めている。これまでの暮らしが継続できるよう(得意なもの)に努め、安心して過ごせるよう支援に努めている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の暮らしについては、毎日の記録で情報共有し、毎月のユニット会議等で担当職員から発信し、職員間で共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者と担当職員を中心に、利用者、家族の意向を取り入れ、介護計画を作成。毎日の実施状況を記録、毎月のモニタリングと会議等で情報共有し、3カ月毎にモニタリング総括し、計画を見直している。	日々介護計画に沿ったケアを行い、実施された生活状況を確認し記録にまとめている。3カ月毎にモニタリングを定期的に行い、現状に即した利用者主体の介護計画が作成されている。家族からの要望は面会時や電話で確認し見直しを行っている。	担当職員が中心となり、利用者主体の介護計画作成に努めているが、家族と共有している確認ができなかった。今後、カンファレンスやモニタリング等に本人、家族の参加を得た介護計画の見直しの作成を期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子をパソコン入力し、情報の共有やモニタリングに繋げている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	主治医や薬局の薬剤師にはその都度助言をもらい対応している。必要に応じて、母体施設の看護師やリハビリスタッフ、管理栄養士等に助言をもらうことができる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の理美容室や歯科医院を利用したり、祭り時の神社へのお参り、町内会館へ老人会の輪投げ練習会に参加させてもらっている。年に数回、保育園、小中学校との交流の機会がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力病院精神科以外は、基本的には家族に依頼。家族の希望により、隣接の内科受診対応者が複数あり、薬局と合わせて情報共有できている。利用者全員のインフルエンザ予防接種は訪問で接種してもらっている。	隣接する内科医院や協力病院精神科と医療的環境に恵まれ、家族、利用者は安心して受診できている。また、必要に応じて家族の代行として職員が付き添い、主治医へ情報提供も行っている。家族からの受診協力も良好であり、薬局と情報共有しながら良い関係で支援されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員はおらず、何かあれば、母体施設看護職員に連絡し、指示を仰ぐことはできるが、ほとんどは、状況を見ながら家族と相談する等して主治医に繋げることが多い。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際には、まずは入院先の治療方針を優先し、退院時は、医療機関から連絡を受け、情報交換や相談をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所契約時に、共同生活が難しくなった際には、退所の方向となり、他施設入所等を考えて頂かなくてはならない旨説明。重度化が進んでいる利用者に苦慮しながら対応している現状もあり、早い段階での話し合いにはなっていない部分もある。	重度化や終末期のあり方について、契約時家族に伝え同意を得ているが、利用者の状態変化に合わせ、家族と情報を共有しながら病院、施設への移行を支援している。今後事業所での共同生活が困難になった場合は、本人、家族の意向を踏まえ協力病院との連携を図り、対応については今後の課題と考えている。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	母体施設での心肺蘇生講習会に参加。今年度に入り、意識喪失し、救急搬送した事例が1件あり対応した。日中発生し、職員間で協力しながら対応した。ヒヤリハット、事故発生時には改善策を検討している。	急変や救急搬送に備え、母体施設の研修、講習会に参加し急変時の対応の確認を行っている。今年度、急変による救急搬送の事例が1件あり知識、技術としての対応を行った。また、事故発生時には改善策を検討し、前向きな姿勢で実際の場面で活かせるように努力している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の中学校主催の水害訓練に参加し、実際避難する際には、地域の皆さんの協力が必要になってくる旨お願いした。年3回火災時防災訓練実施予定。そのうち1回は、地域の方にも参加、見学をして頂く予定。	年間防災訓練計画に従い実施している。今年度は地域の中学校主催の水害訓練に参加し反省点も多く、災害時には近隣住民の協力体制の必要性を感じたところである。今後、運営推進会議等で協議検討し、災害対策と地域との協力体制を築いていくことが期待される。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	グループの権利擁護委員会発信の穴埋め問題や、地域密着型6施設の全体研修後、各自の目標を立て、日々対応を心掛けているが、自己評価から、時には適切でないと感じる言葉掛けも見受けられる。	6施設の全体研修や権利擁護委員会の問題集などを中心に利用者と向き合い、個別的ケアに取り組んでいる。各自目標を立て、自己評価から日々反省点を見つけ、気づきの声掛けを行い、虐待防止やプライバシーの確保に向け、全員で理解を深め研鑽を重ねている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の様子等から好みを考慮し、職員が準備している部分もあるが、自己評価から、小さなことではあるが、自己決定してもらえるように、場面場面で働き掛けをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事やお茶、体操やレクリエーション、掃除等の日課には、基本的に声掛けをして参加、解散してもらっている。その他は自由で、体調や眠気の様子を見ながら、部屋で休んでもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪の希望があれば、理美容室に連絡を取ったり、季節に合った衣類の準備や必要な物品があれば、家族に依頼している。重度化してきている利用者の対応に時間を要し、ひげ剃りの支援が難しい日もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	苦手なものは代替品等を準備している。献立に季節の食材を使うようにし、誕生日には希望献立を取り入れている。食事準備はできることをしてもらい、状態に合わせて配膳、下膳をしてもらっている。	利用者の希望や嗜好を献立に取り入れ、季節の食材を使い利用者は職員と共に食事の準備や後片付けなどできる範囲で個々の力を発揮している。四季により、園庭の畑で収穫された野菜を利用した料理が提供され、職員と共に食卓を囲み活動と語らいの時間となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎月、母体施設の管理栄養士に献立の指導を受け、バランスの取れた食事を心掛けている。水分摂取の難しい利用者には、声掛けや、飲めるものを探り提供し、水分補給をしてもらえるように心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声を掛け実施し、必要に応じて介助しているが、自力で出来る利用者の口腔状態の確認はできていない。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の排泄パターンに合わせ、適宜、声掛けやトイレ誘導をしている。臥床時にポータブルトイレを使用している利用者もいるが、離床時にはトイレ誘導している。	利用者個々の排泄パターンを把握し、適切な時間誘導を行なう排泄支援に努めている。病院退院後に紙パンツから布パンツに移行した事例もあり、自立に向けた支援と機能低下予防の取り組みに努力している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日、牛乳、ヨーグルト、乳酸飲料のいずれかを献立に取り入れ、水分摂取の声掛け等をしたり、ラジオ体操、歩行運動の機会を作っているが、整腸剤や下剤を服用している利用者が多い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	午睡明けから夕食前の間に入浴してもらっている。個々の希望に添うことはなかなか難しいが、声を掛け、ゆっくりと入浴してもらうようにしている。体調等に配慮しながら、1日おき～毎日入浴をしてもらっている。	個々の希望や状態に配慮した個別対応に努めている。1日おきから、要望があれば毎日入浴にも応じている。拒否がある場合は時間変更したり、タイミングを計って希望に沿った方法で気持ちよく入浴できるよう心掛けている。また季節にちなんだ湯や石鹸の工夫などが利用者から好評を得ている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	寝具の清潔に気を付け、掛け物、室温、照明、音等、安心して眠れるように配慮している。夜間眠れない利用者については、日中の活動の見直しをしたり、主治医に相談している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書をファイルに綴じ、各自で確認できるようにしている。症状の変化があれば、記録に残し、職員間で情報共有し、主治医に繋げるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事作業や、掃除等、それぞれにできることをしてもらうことで張り合いを持って過ごしてもらったり、毎日のレクリエーションの時間や毎月の外出外食行事を計画し、楽しみや気分転換の機会としてもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	個々の希望に添うことは難しい状況である。日常的な外出は、個別対応となってしまうが、ゴミ捨て、食材の買出し、地域の輪投げ練習会に参加してもらっている。地域の理美容院へは、個別に送迎したり、送迎してもらう利用者もいる。	季節に応じて個々の希望に沿うことは難しいこともあるが、日々の生活支援の一環として、食材の買い物、地域行事の参加、美容院など外出を楽しむ機会を設けている。暖かくなれば散歩や花植えをして戸外で過ごしたり、外気に触れながら気分転換を図れるよう支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は所持してもらっていない。日常や外出時の必要時には立替払いをしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	荷物が届いた際に、本人から電話口に出てもらったり、電話が来れば出てもらっている。希望があれば対応している。手紙のやり取りの機会はない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者家族から季節毎に花を頂き、飾らせてもらったり、毎月の手作りカレンダーを飾り、季節の話題に取り入れている。照明やエアコンを使用し快適に過ごしてもらえるよう努めているが、季節の変わり目の温度調整が難しい。	リビングは天井の梁も高く、越後杉のブランド材を使用し、木の温もりと懐かしさが在宅生活の延長を感じさせている。共有空間は明るく手づくりカレンダーが飾られ季節感が利用者の心を和ませてくれる。程良いゆったりとした工夫が生活環境の一環となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間の中では、独りになることは難しいが、ソファは配置されている。決まったスペースの中で難しい部分もあるが、利用者間の関係性に配慮しながら、状況に合わせて配席を変更している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのものを持参している部屋と、そうでない部屋があるが、担当職員を中心に、居心地良く過ごしてもらえるよう配慮している。	本人が自宅で使用していた愛用の家具やテレビ、日用品を持参することで、落ち着いた生活環境の工夫がなされている。在宅生活の習慣で、ロッカーに片付ける人、室内に写真を飾り家族を思い出す人、それぞれの飾り物で安心される人など、担当職員を中心に本人が居心地よく過ごせるよう支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	共用スペースには手すりがあり、安全に移動できるようになっている。室内は本人が使いやすい配置となるように適宜検討している。入口に名前を貼ることで、自分の部屋だと認識できている利用者もいる。		